

「米で育つ牛」

田んぼのチカラ つかう人

飼料用米を使った新しい試み

米どころ秋田で、

おいしく育つ肉牛を生産するゆりファーム。
ソフトグレインサイレージ（SGS）による
肉質改善とコスト削減に成功しました。

秋田県
ゆりファーム

事例紹介

稲作農家・畜産農家ともに嬉しい
秋田の米で育った
ブランド牛「秋田牛」

米どころ秋田では、飼料用米を活用したブランド牛「秋田牛」の生産が行われています。その中で、由利本荘市の畜産農家で組織する株式会社ゆりファームでは、稲作農家から仕入れた生もみをSGSに加工し、畜産農家に販売しています。

SGSは、生もみを乾燥させずに粉碎、加水、乳酸発酵させ、密封して2カ月間熟成させたもの。乳酸発酵させることで、牛の食欲が高まり、保存がきくというメリットもあります。稲作農家としては、収穫した生もみのまま費用をかけず出荷することができ、畜

産農家も輸入配合飼料と比べ、安価で安定した供給を受けることが可能です。ゆりファームの堀内忠代表取締役は、「SGSを食べて育った牛は脂がくどくなく、後味さっぱりでおいしい」と、今後ブランド牛として人気が高まることを期待しています。

こうした取り組みを県も積極的に後押し。「協力し合ってさらに秋田牛を広めたい」秋田県農林水産部畜産振興課・赤川淳美課長」と語っています。

SGSは、粉碎した生もみに水と乳酸菌を加えて密封し、発酵させた飼料。消化しやすく、長期保存も可能に

稲作農家も畜産農家もコストを減らして利益を上げられる仕組みです。秋田の米で育ったブランド牛を生産しています。

市営牧場の「ゆり高原ふれあい農場」。ブランド牛の基幹牧場としてだけでなく、観光資源としても活用している

SGSは
僕らの
大好物だよ！



主食用米を作っていた田んぼでも飼料用米が十分採れるんです！ 中には小麦との二毛作を行う人もいます。

メンバー全員では場を視察して、侃々諤々の議論が行われる。全員がライバルでありながら、「単収1t」という同じ目標を持つ仲間だ



“多収穫ローコスト”を合言葉に、秋川牧園が鶏糞を無償で提供。中には購入資材がほぼゼロで、単収800kgを超えた例も。「北陸193号」は、穂数ではなく穂の大きさを重視して育てていく

「目指せ 単収1t！」

飼料用米の多収化に挑戦

多くの収穫が望める飼料用米の栽培に取り組む秋川牧園飼料米生産者の会。ベテランと若手が一緒にあって、単収アップを目指しています。

山口県
秋川牧園
飼料米生産者の会

多収品種「北陸193号」でモミ単収1tを達成した経験を持つ、秋川牧園飼料米生産者の会の海地博志さん。平均単収は900kgで、同会の単収トップの常連

飼料用米を
新たな収益の柱に！

山口県山口市と防府市を中心に、地域の約20軒の農家や法人で結成された秋川牧園飼料米生産者の会では、多収品種に取り組みすることで飼料用米の単収1t（モミ重、以下同）を目指し、各農家がしのぎを削っています。

同会が飼料用米に取り組み始めたのは平成22年。初年度こそ平均611kgと低調だったものの、2年目から多収品種である「北陸193号」に切り替えたことで、平均690kgにまで増収となりました。

倒伏に強いという特徴を利用して、複数回の追肥を行うなど、肥料の入れ方も多収品種に合わせた設計に工夫。試行錯誤の甲斐あって、2年目以降には単収1tを超えるメンバーも現れました。

秋川牧園の秋川正社長は「飼料用米は、稲作農家にとって新たな収益の柱となりえる事業。補助金に依存するのではなく、品種の改良、水田面積の拡大など、改善を続けていきたい」と語っています。

※私たちが食べているお米の平均単収は約530kg（玄米重）。

田んぼのフル活用を目指そう！

田んぼをフル活用した飼料用米の生産は、稲作農家、畜産農家、消費者に大きなメリットをもたらします。

道は
まだ続く…

飼料用米をたくさん
作ることで、みんなに
メリットが！

飼料用米を安定して
受け入れたい畜産農
家が増えています。

田んぼの理想的な未来の姿を描くため、
さまざまな取り組みでフル活用を推進していきます。

● 田んぼの未来は私たちの未来

取り組み

飼料用米110万^{トン}生産への 一歩を踏み出そう

畜産農家からの需要の高まり

飼料用米の需要量

平成27年産に係る飼料用米の需要量

畜産農家の新規需要量
約4.5万 t

平成27年産
約128
万 t

全農グループ飼料会社
年間60.0万 t

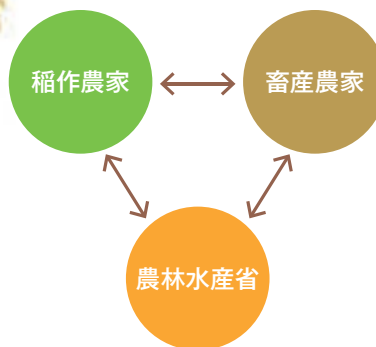
日本飼料工業会組合員工場
年間63.4万 t

まだまだ伸びる飼料用米のニーズ

平成27年産の飼料用米に対して畜産農家から寄せられた希望量は、約4.5万 t。さらに全農グループ飼料会社、日本飼料工業会の需要を合わせると約128万 t となり、日本飼料工業会は中長期的に200万 t の需要を見込んでいます。

積極的なマッチング活動

取り組み体制



マッチング活動の成果

農林水産省が行っているマッチング活動では、稲作農家が農協に出荷した飼料用米を、農協が責任をもって畜産農家に届け、双方が安心して生産、利用できる体制を目指します。

みんなで作った
「舞米豚（まいまいとん）」

稲作農家と畜産農家の マッチングで産業を活性化

農林水産省では、地域内で飼料用米を生産する稲作農家と、その利用を求める畜産農家とを結びつけていくため、各自治体に呼びかけ、稲作農家と畜産農家とのマッチングを積極的に行っています。

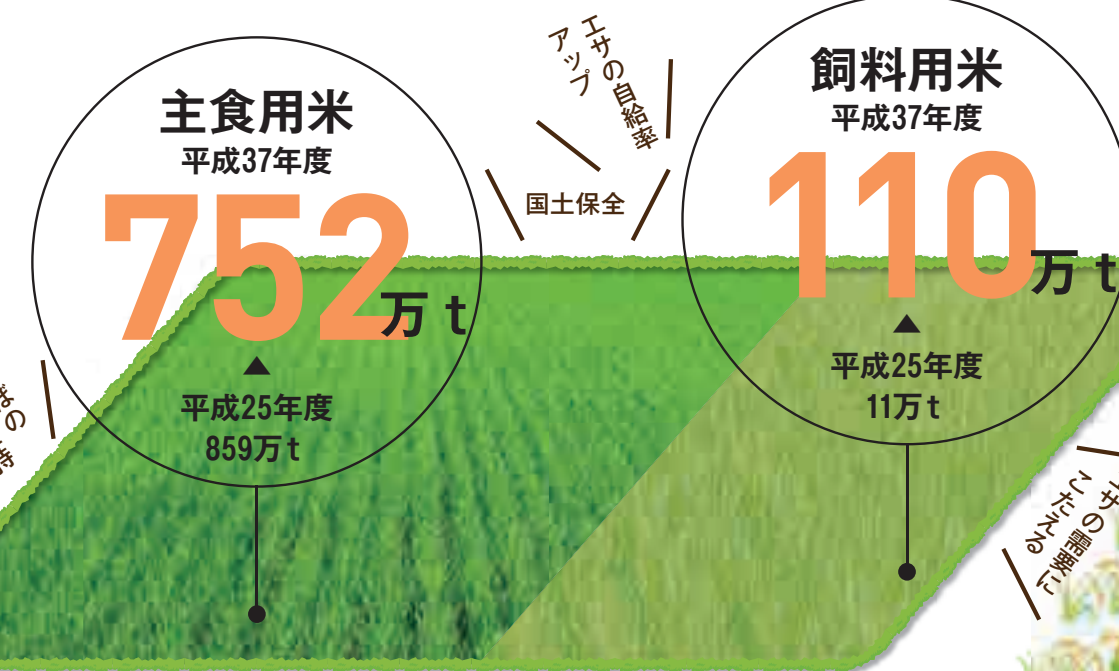
山形県山辺町では町が中心となって、地元の稲作農家が作る飼料用米を、町内で養豚業を営んでいた山形ビッグファームで活用できる体制をつくり、地元の米で育った豚、「舞米豚」のブランド化を実現しました。

山形ビッグファームの阿部秀顕代表取締役は「オレイン酸が多く、味が良いと評判の舞米豚。知り合いの農家さんが作った飼料用米を使って、町のブランド品の確立、産業の活性化に貢献できたことは、とてもうれしいです」と語っています。

みんなで取り組む 田んぼづくり

田んぼをフル活用することで、飼料用米110万 t という生産努力目標が達成されれば、食料と飼料の自給率アップ、地産地消による生産品のブランド化、治水、自然環境や景観の保全など、地域の農畜産業の振興だけでなく、みんなの暮らしも豊かになる未来を描くことができます。

それは、お米の生産性を高められる稲作農家はもちろん、飼料用米を安定して仕入れられる畜産農家、おいしい肉や卵を食べられて美しい国土で暮らせる一般消費者も含め、みんなが幸せになれるということ。10年後に日本各地の田んぼがフル活用されることを目指して、国や自治体、農家などが一体となった取り組みを続けていきます！



食料・農業・農村基本計画

今、注目の飼料用米

平成27年3月に閣議決定した「食料・農業・農村基本計画」において、飼料用米の生産拡大が重要な取り組みの一つとして位置づけられました。政府は、平成25年度に11万 t だった飼料用米の生産量を平成37年度には110万 t に引き上げることを目標として掲げ、その確実な達成に向けて必要な支援を行うこととしています。

生産拡大に向けた支援策

施設や機械導入への支援

必要とされる施設や機械の導入支援を行います。カンントリーエレベーターや加工・保管施設などの設備に関しては、国や自治体としても積極的に後押しし、飼料用米の生産利用能力の向上を推進していきます。

水田活用の直接支払交付金

飼料用米の実際の収量に応じた金額が交付されるとともに、二毛作や耕畜連携の取り組みについての加算も行われます。また、多収品種に対する取り組みにも追加交付を行います。

【飼料用米についてもっと知りたい方は…】



農林水産省
飼料用米の生産・利用拡大サイト

『別冊現代農業』2015年3月号
『とことんつくる 使う 飼料米・飼料イネ』
『DVD つくるぞ 使うぞ 飼料米・飼料イネ』（全2巻）
発行／一般社団法人 農山漁村文化協会
<http://www.ruralnet.or.jp>

